

# 否定機能の轉位

## —— 接続詞 denn の除外意に対する一試論 ——

藤 井 智 瑛

ドイツ語法に於いても割に古風な語法的一種として、接続詞 denn を接続法 (Konjunktiv) と共に用ひて、除外の意、又は否定的条件の副文章を表はす構文がある。しかし厳密に考へると、この構文には、色々の疑問がふくまれているようである。先づ次の二つの文例から觀察してみよう。

Es sei (od. wäre) denn, dasz ich mich irre .....

Mein Leben will ich verlieren, sie werde denn mein Weib.

これは今では公式通りの除外、若しくは否定的条件文になっているので、少くともドイツ語文法に通じている人ならば、すぐ訳すことが出来るであらう。前者は「私の思ひ違ひでないならば……」、後者は「彼女が私の妻にならないなら、私は死ぬであらう。」となることは論を待たない。

しかし、この両者に於ける「ない」はどこから表はれたのであらう。更に二つの文章をもつと解り易いドイツ語でかくと、

wenn ich mich nicht irre, .....

Mein Leben will ich verlieren, wofern sie mein Weib nicht wird.

となるが、この際あらはれる nicht は先の文例のどの語の中からひき出されるのであらう。今日公式的に辞書に示されている denn の除外意は、果して denn の本来の意味であらうか？ 換言すれば、この denn そのものに一種の否定的機能があるのだらうか？ それともこの否定意は動詞接続法の中から汲みとられるべきであらうか？——此処に文例の疑問点が存在するのである。

先づ denn そのものの意味を各種の辞書によつて ethymologisch にしらべる必要が出て来る。例へば Pabel u. Euling ; Deutsches Wörterbuch ; Kluge ; Ethymologisches deutsches Wörterbuch, Sander ; Deutsches Wörterbuch, その他 Grimm の大辞典等によつてしらべてみると、denn は元来、dann と同義であり、十八世紀中葉以降、両者の使用法が次第に分れて来たという事になっている。そうとすれば denn の前身である dann にその否定意があるのであらうか？ 併し、どの辞書も、denn = danne は ausserdem wenn, wenn ... nicht の意で用ひられるが、決して同義の構文に不可欠の語ではないという点で一致している。

こう觀察して行くと、除外、又は否定的条件の本来的機能は、denn そのものにあるのではないようである。

以上の疑点を出発点として、私は Blatz の所謂 Exceptio, 及び Antithetis なる構文に

於ける潜在的否定意の起源に一考察を加へようと思うのである。

先づ便宜上述語そのものの説明から入ることにするが、Exceptio とは、「何ら接合詞を伴はず、主文形式のまゝで除外意を含む否定副文の機能を表す構文」であり、Antithetis とは「同じ形式で否定的結果をあらはす副文機能の構文」である。即ち、

- a) Mein Leben will ich verlieren, sie werde denn mein Weib.

(= …… , { es sei (od. wäre), dass sie mein Weib wird.  
wofern sie mein Weib nicht wird. )

- b) Er entfernte sich niemals, er sagte es ihr denn.

(= …… , { ohne dass er es ihr sagte.  
wenn er es ihr nicht sagte. ) 否定的条件

- c) Da war kein altes Schlesosz, ich hätte es denn besucht.

(= …… , das ich nicht besucht hätte ) 否定的関係文

等の構文が Exceptio であり、

- d) Es ist kein Mutter so arm, sie hält ihr Kindlein warm.

(= …… , dass sie ihr Kindlein nicht warm hält. )

の様な構文には Antithetis が認めらるのである。

いつれの文例に於いても、( ) 内に書き換へた部分に於いて、副文そのものの類別の如何を問はず、必ず否定詞 nicht 又はそれに準ずる否定的語が表はれて来る所に、これら文例の特異性があるといはなければならない。少くとも Schulgrammatik の領域では、この間の消息を明かにして呉れない。

この Exceptio, Antithetis に関しては、文章論的立場から、主として接続法 (Konjunktiv-Lehre) の項、就中、動詞接続法を媒介とし、接合詞なしに他の主文に 従属する副文章の項で論ずるのが妥当のように思はれる。例へば、相良博士著「ドイツ語学概論」、同著「ドイツ文章論」、Blatz 「Deutsche Grammatik. 2. Bd.」, H. Paul 「Deutsche Grammatik 4. Bd.」, H. Paul 「Mittelhochdeutsche Grammatik」, O. Behagel 「Deutsch Syntax, III. Bd.」等、何れもこの問題を接続法論、若しくは副文様式論の項で扱っている。私も決してこの扱ひ方に異議を説へるつもりはない。況んや、Exceptio, Antithetis なる文章の文章論的機能に重点を置けば、諸家の扱方は勿論妥当なものである。而も彼等はいづれも、極めて簡単ではあるが、Negation の項でも再考を加へている。併し私は、日本語を用ひる人として、それらを日本語に訳す場合に、どうしても否定的意味を加へねばならぬことに疑問を感じた故に、あへて否定語法の一項として考察を試みる次第なのである。

擬、前にものべたように、多くの文法家はこの形式の諸文章は大抵 denn を伴うと論じ、更に多くの辞書は、denn そのものに除外意があると論じている。併し、文例 d), 更に諸家が引用する多くの例の如く、denn を伴はないで除外文をなす例が非常に多いのであつてこれをみても、Exceptio に於いての denn は必ずしも不可欠の要素でないことが想像出来るのである。ましてや denn そのものに、nicht の機能が含まれるとは到底考へられないのである。

先づ私は、denn が除外意を持つようになつた課程を今少しく委しく言及してみたい。

蓋しある語の意味には、(又は機能には)その本来的なものと、時代の経過の中に二義的に発生して来た意味(機能)がある。denn を ethymologisch にしらべて知りうる多くの意味を、先づその二つに分けて考へなければならないのである。少くとも denn に於ける「除外」の意は決して、denn の本来の意味ではないのである。私はこの除外文に於ける denn の一つの解釈を、相良氏著「ドイツ語学概論」(S. 296.)に見出した。著者は此処に：「Das werde ich nie glauben, er müsste es mir denn selbst sagen」という一文をあげこの文に於ける denn の機能を説明している。即ち「私はそれを決して信じないであらう、若し信ずるとすれば(=denn←dann)彼は自ら私に言はずばなるまい」と解釈して denn の意味を説明しようとしている。成程この解釈は、今日の文法概念、特に日本語的語感で考へた Konjunktiv の機能から考へれば、一応うなづきうる解釈にみえる。しかしこの解釈に既にいくつかの矛盾が感ぜられる。先づ考へ方として、主文と条件文の本来の機能を逆転させたことであり、しかも、主文内容の否定意を肯定意になほして条件化していること、更に、denn の除外意そのものの説明を果していないということ等である。敢へてこの形式の古形に固執する訳ではないが、私には氏の解釈は、この形式の文章の史的発展を無視しあまりにも現代語文法の語感に依存しすぎた解釈に思はれるのである。

私は相良氏の説明に対する反証を先づ Behaghel「Deutsche Syntax」Ⅲ. 112 頁以下、その他数ヶ所に発見出来たのである。(尙、H. Paul, Blatz 等にも多くの反証を指摘することが出来ると思う)

少くとも中高ドイツ語まででは、所謂 Exceptio に慣用的に併用された denn と、更に独立した従属接続詞で今日の ausser, nur dasz—の意で用ひられた denn の二種類があり、而も、夫々の生成課程はやゝ異なるようである。前に述べた様に、元来 denn と dann は全く同じ語であつたのである。dann (=danne) は古くは thanne という形で、今日の darnach の意味で用ひられていた。この darnach の意味が更に「unter diesen Umständen」の意味が発生するのである。このようにして、ある前提にもとづいて生起する結果事実を導く語として、特に dann という形が用ひられるようになる。即ち dann は後続する事実の、先行事情に対する連関性をあらはす語となる。併し、すでに Althochdeutsch 時代に、danne (=dann) はしばしば疑問文の中に用ひられる様になり、この danne が固定化し、単なる疑問意の拡張詞に変わってしまうのである。これがそのまま今日の疑問文に挿入される形式的 denn の前身なのである。この種の dann が denn に移行したのは主として、韻律上の理由によるのである。ある場合には疑問文中の dann はある種の焦燥感を表はす。「そんな事情に於いて」という古い意味の名残りがまだこの疑問拡張詞としての denn にあるのである。所謂 Exceptio にあらはれる dann (=danne) は、この疑問文に用ひられる denn と同じ系統のものである。即ち Exceptio は逆れば、この種の denn を伴う疑問文に結びつくべきである。この点に関しては、以下にかゝげる文中の Exceptio をそれぞれ、疑問文にかきかへてみると、意味上のつながりがやゝ明白になる。

Das werde ich nie glauben, er müsste es mir denn selbst sagen. (= Das werde ich nie glauben; Müsste er es mir (nicht) selbst sagen ?)

Er gäbe dir niemer deheinen Ion darumbe, du enhabest danne den alten glauben,

(……, habst du (nicht) den alten glauben?)

ich lasse dich nicht, du segnest mich denn. (= Segnest du mich (nicht)? So lasse ich dich nicht.)

更に Behaghel が言うように、「この種の denn を同時に文章類型の成立課程を説明することなしに解釈しようとする試みは、間違っている」のである。

私達はまた、Exceptio は一種の条件文 (Bedingungs-Sätze) であることを忘れてはならない。条件文の生立は二通り考へられる。即ち、古い疑問文から成立したものと、要求文から成立したものとがそれである。周知の如く従属接続詞による条件の副文の成立は割に後期のものである。接合詞を伴はない条件文には、独立疑問文の配語法をとるものと、独立主張文章の配語法をとるものがある。先づ前者についてみると、この疑問文形式の条件文は、相当古い時代 (Germanische Zeit) の形式で、通常動詞は直説法現在が用ひられた。この種の条件文は疑ひもなく、古い疑問文に遡りうる。時によつては、フランス語のこの種の文章にみうける如く、その条件文の直後に疑問符(?) がうたれている: bist du hie? nuo sist willekum. 独立疑問文としての資格をなほ保っているため、動詞も直説法 (Indikativ) を用ひているのである。接続法現在を用ひた疑問文形式をもつ条件文が発生したのは割に後期のことで、Mittelhochdeutsch 以降にはじめてあらはれたとみるのが妥当である。疑問文の語序に従うのが通例だが、これは前の古い疑問文の名残りである証拠である。

独立主張文章の配語法による条件文の代表的ものは、Exceptio である。この文章においては通常接続法現在又は過去形が用ひられる。この文章形式がはじめてあらはれたのは、Altsächsisch 及び althochdeutsch である。

mich entriege min wan, daz habt ir durch schimpf getan. (=Es sei denn, dasz meine meinung mich betrügt, ……)

mines herzen tiefiu wunde, diu muoz iemer offen sten, si enküsse mich mit friundes munde (=Tiefe Wunde meines Herzens musz immer offenstehen, wofern sie mich nicht mit dem freundlichen Munde küsst.)

これらの形式の Exceptio は今日尙 Es sei (又は wäre) denn, dasz …… の形でのこつている。思うにこの種の文章も昔の疑問文の変形である。現在のドイツ語に例をとつて説明すれば、Die Menschheit kann nicht gerettet werden, ich gäbe denn mein Leben für die Menschenkinder. という文章の Exceptio は、Sollte ich nicht mein Leben für die Menschenkinder geben? という一種の焦燥感を伴つた詠歎的疑問文が、条件文化したものである。この種の Exceptio は Wolfram や Goltfrid あたりまでは、大体主文章の前に置かれている。Hartmann たちの文章からは、前置、後置が丁度半々位である。而も、この種の文章に denn が挿入されるようになったのは、Mittelhochdeutsch 時代であり、はじめは、主文章に先行する Exceptio にあらはれたのである。そして、その種の前置文たる Exceptio にあらはれた denn は、古来の疑問拡張詞としての役割をもち、更に発生的にみれば、前に示した。「unter diesen Umständen」の意で、それに先立つ文章の内意をうけついだ語なのである。これと全く同じ役割で、肯定意の前置的条件文にさへも、頻繁に

denn が出現していることもあつたのである：…… So swig ich unde laze in reden dar; hete ich ougen oder oren danne da, so kunde ich die rede verstan. (私はそのまゝ彼に語らしておこう、そのような事情で私が耳目を持つなら、話の筋合ひも解るというもののだ。) 以上の説明は主として Behaghel を基準としたのであるが、これによつてみても、相良氏の如く、主文内容を条件化して denn にうけつがせ、本来の除外文内容を説明しようとすることは、本末顛倒も甚しいと言はざるを得ない。

したがつて、除外文 (Exceptio) に於ける denn の機能は決して、一義的なものでなくむしろ、条件文成立課程中、全く別な理由によつて、denn が特に Exceptio に導入されたのである。元来多くの辞書に説明されている denn の独立した除外意 (auszer wenn..., nur dasz) は、上の Exceptio の denn とは生成事情を異にするのである。一言で言へば、それは独立した除外意の従属接続詞として用ひられた今一つの denn の用法の名残りのみである。即ち、今日の auszer wenn, nur dasz ... の意味で独立して用ひられた古い接続詞は、mhd の wan であつた。この wan と denn の音価的近似性のため、次第に混用され始め、終ひには denn そのものまで独立した除外意の接続詞として用ひられるようになったのである。この種の denn に導かれる除外意の副文の構造は、その性質上、所謂 Exceptio の構造と根本的に違ふのである。したがつて、Exceptio に於ける除外意、若しくは否定的条件文の機能の発生は、denn それ自体の機能とは、殆んど無関係に生じたことが解るのである。Behaghel の言によれば、「それは Satzart の生成そのもの」から推論されなければならないのである。

denn そのものからは、Exceptio 内の否定意がひき出され得ないことは、以上のことから想像出来ることである。尙 denn のその他の機能に関しては、今此處で論及する必要も余裕もない故に、省略することにする。

扱、次に Exceptio, Antithetis に於ける否定意の由来について考察してみたい。

大体において、多くの文章構造内の各種の変形は、論理的な課程をたどることが割に少く、むしろ言語使用者の音韻上のくづれに起因するものが多いように思はれる。

Exceptio, Antithetis に於ける否定意も決してその構文中から論理的にひき出され得るものではないのである。当然表面にあらはれるべき否定の語が、言語主体者の習慣的音韻のくづれによつて消失、又は脱落してしまつたのである。特に構文上のある形式的特性が、否定語なしにも十分他の文章形式から Exceptio を区別出来たことが、一層この否定詞消失を容易ならしめた訳である。後に更に委しくのべるが元来、外形的に明示された否定詞を伴う一定の語法が、習慣上のくづれをしめし、否定語自体が脱落消失すると同時に、それ以外の文章形式の特性が、否定的機能を代行しつゝ表面に出て来たのである。

今説明の便宜上、Blatz の所謂 Exceptio, Antithetis なる文章形式を、その内容に応じて更に下の如く四つのグループに分類し、それぞれを歴史的に観察してみよう。

- A) 今日の語法では、主として *wofern nicht, wenn nicht, es sei denn, dasz ..., es wäre denn, dasz ...* 等の形に置きかへられ得るもの。否定的条件文とも称すべきもの。この副文に対する主文章は *positiv* でも *negativ* でもかまわない。

- a) Und nimmer fällt die Burg des Priamus, du strebest denn, wie es der Seher fordert. (Schiller)
- b) Man kommt zum König nicht, er müsz't es erst (=denn) begehren (Goethe)
- c) Mein Leben will ich verlieren, sie werde denn mein Weib.
- B) 今日の語法では、否定的関係文に置き換えられ得るもの。通常それに対する主文章は否定文である。
- a) Da war kein altes Schloß, ich hätte es denn besucht.
- C) 今日の dasz nicht, ohne dasz, ohne ... zu-infinitiv に置き換へるのを妥当とするもの、これに対する主文章は常に否定文であることを要す。
- a) Es ist kein Strick so lang, man findet sein Ende.
- b) Es ist keine Mutter so arm, sie hält ihr Kindlein warm.
- c) Es ist kein Lügner so schlau, er verrät sich.
- b) Es ist kein Männerherz so rauch und wild, der Blick der Frauen macht es sanft und mild.
- D) 今日の語法に従へば, auszer dasz, als dasz, nur dasz ... 等の副文章に置き換えられうるもの。主文章は否定文でも, 肯定文でも宜しい。
- a) Waz möhte dër macbräven tuon, ër'n hëtte auch trûrens dô genuoc. (= Was andeps könnte der Marcgraf tun, als dasz er da viel Trauern hätte.)

以上に掲げた例は、主として Nhd. (新高ドイツ語) の領域のものであるが、これらの語法は、Mhd. 時代に極めて頻繁に用ひられた所の「接合詞を用ひず, ne + 接続法 (Konjunktiv) の構文でその文の従属位を示す語法の名残りなのである。

A) に属する例 :

- a) mich enmac getrœstnen niemen, sie entuoz. (= Mir kann niemand Hoffnung geben, wenn sie es nicht tut.)
- b) turne und mûre muose zuo thër ërthe, sine wolten cristen wërthen. (= Türme und Mauer musz zur Erde zerstört werden, wofern Christen sie nicht wehren.)
- c) dën lip wil ich verliesen, si enwërde mîn wip. (前提文例。A) c) と同じ意味)

B) に属する例

- a) ich waene nieman in dër wërlte lëbe, ër'n habe ein leit. (= Ich meine, dasz niemand in der Welt lebe, der kein Leid habe.)
- b) daz man dër vremeden (pl. Gen.) harte wënic (= negativ) vant, sine trüegen ir gesteine. (= dasz man der Fremden sehr wenige fand, die ihre Edelsteine nicht trügen.)

C) に属する例

- a) Deheine sünde wart sô grôz, sin' habe mit riuwe widerstoz (= Keine Sünde wurde so grosz, dasz sie nicht mit Reue Widerstosz hat.)
- b) niemen ist sô starker, er'n müze ligen tôt (= Niemand ist so stärker, dasz er nicht tot liegen müsse)

- c) ich erstërbe niemer, ichn erwërbe deine Hulde (= Ich sterbe nie, ohne dasz ich deine Liebe gewinne.)

D) に属する文例は省略する。

上掲の諸例に於いて、いづれの文にも *denn* が無いことと、従属性が、否定詞 *ne* と接続法動詞によって示されていることに注意する必要がある。したがって *Exceptio* なり、*Antithetis* なりの否定機能及びその機属性の機能は決して *denn* そのものにあつたのではないのである。

この *ne* + 接続法の構文による除外文又は *Antithetis* の指示が古い英語 (*Altsächsisch*, *altenglisch*, *mittel-englisch*) 等にもあつたことは、多くの語学者の認める所である。例へば「英語の歴史 (*Geschichte der Englischen Sprache*)」の著者 E. Eickenkel も、その著の第二巻、*Historische Syntax* (Straszbürg. 1916.) の76頁以下に、この事実を概説している。これによつても極めて古い時代から、一種の否定的接続詞が存在していたことが解る。

否定的内容の主文章動詞の後に頗出する. *nord. m. e* (北方中世英語) の *þat ne I do* (= *þat I ne do*) は大体今日の *if it were, that ... not, if it were not for* を意味する構文であるが、これにおける *ne* は、おそらく純粹の動詞否定詞を表はすものでなく、かなり古い時代の否定的接続詞 (*Negative Konjunktion*) *nē* (←*ni*) の名残りであり、これだけでは動詞否定詞と混同のおそれがあり、更に接続詞的機能の方が曖昧化するおそれがある故に、強ひて接続詞的機能を表面化しようとして *þat* (= *that*) を併用するようになったのである。Altenglisch. にはこれに相当する形はないが、Altsächsisch には純粹な否定接続詞の古形 *ni* が残つていた。尙古い北方英語の方言には、*war-ne* 又は *were it.....ne* という形で今日の *if it were not for* 又は *that not* に相当する形があつた。

此処に登場した否定接続詞 *ni* にも色々の用法があつた。その中の一つとして、明かに *if it were, that not, if it were not for* の意味、即ち除外又は否定的条件文の意味で、否定的主文の副文章を導くに用ひられたことが明示されている。(lateinisch では *non est quin*.) 古フランス語法では、*n'est nuls que ils ne ...* の形がこれにあてはまる。古代英語の領域でも、この除外文の否定意を他の肯定語が奪うという、ドイツ語に似た変遷が行はれているのは注意する価値がある。今日の *there is no castle but I have visited it. He is not such a fool but he can tell that.* 又は *but if that* 等の構文に於ける *but* の役割がそれである。第一の例は *There is no castle that I have not visited it* と書き換へることを見ても、その間の消息はドイツ語のそれとよく似ていると言はなければならない。この間の変遷も明かに英語学史上にもとめられうるのである。最古形の否定的接続詞 *as, ae.* (= *Altsächsisch. altenglisch*) の *ni* は *þat ... ne* となり、尙これが更に *butan* (= *if it were, thet not*) に書き換えられる様になる。この *butan* が、今日尙しばしば否定的関係代名詞として用ひられる *but* の先祖なのである。 *There is not a man meet but he salutes me.*

勿論これら多くの例にあらはれる「*ne*」という否定詞の否定機能の強さそのものが問題となるが、H. Paul や Blatz 等が、*ne* 自身に一種の副文接合詞の役割をもたせ、更にこの *Exceptic, Antithetis* の構文を掲げ「元来 *ne ... niht* という形で一般的文章否定機能

を發揮すべきものが、ある特殊の場合には習慣上否定強化の *niht* だけを省略しても宜しい。特に除外文等にあつては、むしろ *niht* を入れないのを原則とする」と説明している以上、たとへ *niht* が消失したとはいへ *ne* を含む *Exceptio*, *Antithetis* に否定意が尙存在することは明かであるといはざるを得ない。少くとも古い時代のドイツ語では、この *ne* なる否定詞は、無用の長物でなく、むしろ構文上不可欠の語であつたのである。

疑問文を先祖となす一種の条件文の変化である *Exceptio*, *Antithetis* 内に、先にのべた疑問拡張詞の名残として *denn* が入つていた例は、可成り古い時代からあつた。この種の *denn* はある程度まで無意識裡にこの構文内に入りこんでいたといはねばならない。しかし一方には、これと別に *wan* との混用から、*denn* それ自身にも除外的接続詞の機能が生じていたことを忘れてはならない。中世ドイツ語期の中頃に到つて、*Exceptio*, *Antithetis* の語法を、これとよく似た他の構文、例へば、主文形式の間接語法の副文等から明確に区別する意識から、特に *Exceptio*, *Antithetis* の中に *denn* を入れる語法が生じたと考へられる。

swaz (= So was) lebete in dem walde, ez entrünne danne balde, das was zehant  
(= auf der stelle) töt.

これとほぼ同じ頃 (mhd. 後期) *ez ensi*, *ez enwaere* (danne) *daz* … という特殊の除外文形式が発生している。通常 *daz* 文章が後続するようであるが、その代りに接合詞なき接続法文章を用ひることもあつた。

es sey danne, du sehest drohenden schaden voraus. (汝おぞましきはじをうけんとするを予知せざれば)

更に *denn* がこの構文に不可欠の要素でなかつた証拠に、前記 *ne* + 接続法式の *Exceptio*, *Antithetis* に属しながら、*denn* を伴はず、而も Satz-betonung の上で割に重要でない「*en*」の脱落した形も多くみうけられる。

Wir scheiden nimmer von dan, wir er wërben in die vrouwen. (= Wir gehen nimmer davon, ohne dasz wir für euch die Frauen gewinnen.)

Ich gesprach ni wol von guoten Wiben, was mir leit, ich wurde vro. (= Ich sprach nie wohl von guten Weibern, ohne dasz ich froh wurde, wenn ich im Leid war.)

この様に、発音上のくづれから「*ne*」が脱落しはじめると、逆に *denn* の方が不可欠化し、*Exceptio*, *Antithetis* の標識として、*denn* を欠く方が稀な状態に変つて来るのである。

*Exceptio*, *Antithetis* が否定詞を伴はない主文形式の接続法文章に統一されたのは、大体 Luther の頃からだとみられている。Luther の文章には、この種類の *Exceptio*, *Antithetis* が極めて多く用ひられている。

a) Mit unsrer Macht ist nichts getan, es streit für uns der rechte Mann. (= Wenn nicht der rechte Mann für uns streitet)

b) Kein Bischof mag bestätigt werden, er kauf dann (= kaufe denn) das Pallium.

c) Ich lasse dich nicht, du segnest mich denn.

勿論, Luther 以降, 多くのこの種の例を挙げることが出来よう。

d) Man sucht keinen hinter der Tür, man habe denn selbst dahinter gestanden.



(Sprichwörter)

- e) Eher stumm' ich nicht mit ein, Es regne denn in meinen Wein (Lessing)
- f) Saget nicht, dasz ich aufstehen soll, ihr habt denn zuvor seine Begnadigung ausgesprochen. (= ohne dasz. Wieland)
- g) Erhält man nichts, man bringe denn was hin. (Goethe)
- h) Die Nürnberger henken keinen, Sie hätten ihn dann vor. (Schiller. Räuber II 3.)
- i) Ich lasse dich nicht vor der Stelle, du hörest zuvor meine Berichte an (Heine.  
後半が Exceptio であるが denn を欠く)

既に Mhd. の頃、極めて稀な例であるが、否定詞 *ne* を欠く上に、更に副文動詞が *Indikativ* となつている *Exceptio. Antithetis* がみうけられる。

Ez n' wart nieman sô wunt, er wirt (durch die Salbe) am dritten tage gesunt.  
= Niemand wurde so stark wund, dasz er (durch die salbe) am drirren Tage nicht gesund wird.

前にも述べた様に *Exceptio* は今日主として *es sei* (又は *wäre*) *denn*, *dasz* ... という形でのこつているが、此れも元来、否定詞 *ne-* を伴つていたものである。即ち、Mhd. では、*ez ensi ez enwaere (danne) dasz* という形だつたのである。更にこの形式の *Exceptio* が「*ni si*」という形で示されている例もある。

Nioman ni cumit zi thömo fater, ni si thurah mich = Niemand kommt zu dem Vater, es sei denn durch mich.

今日此の形式の *Exceptio* の名残りをとどめている不変化詞は「*nur*」である。これは明かに *denn* を伴はず、*ne* と *Konjunktiv* によつて表はされた *Exceptio* の残骸である。即ち *ez enwaere* の *enwaere* が縮合されて、今日の *nur* となつたのである。(enwaere 中の *w* の発音は、今日の「*u*」の発音と同じである。)

中世低地ドイツ語 (Mnd.) の方言に、「*endede dat*」という形がみうけられるが、これは高地ドイツ語の「*entaete dasz*」にあたり、明かに公式的 *Exceptio* の名残りである。この *endede dat* も後に否定詞の *ne* (= 接頭語としては「*en-*」となることが多い) が脱落し、「*dede dat*」という形で、今日の *wenn das nicht wäre* の意で用ひられている。(H. Paul. Grammatik. II)

高地ドイツ語の方言にも、同様の語法がのこつている。 *wenn das täte*, 又は *wenn das nicht täte* がそれである。

Was were für ein Königsreich in Israel wenn du tetest. (Luther I. König)

最後に、否定詞を伴う *Exceptio, Antithetis* の最も古い形が、第18世紀に到るまで、主として俗語の中に残つていたことは、注目に与ひする。これらには一様に *denn* なる語が用ひられていないことをみても、*denn* の *Exceptio* に於ける機能は全く第二義的のものであつたことが解るのである。

- a) Wenn das böse weib nicht täte,
- b) Wenn der verzweifelte Graf nicht täte, ...
- c) Und täte Amor nicht, O welche goldne Zeit!

- d) Hätten Ammen, Kammerfrauen und Gouvernaten nicht getan, so hätte sie mit Gottes Segen ganz wackere Mädchen werden mögen.
- e) Und täte nicht die Krankheit meines Hauses. ……

以上各種の面から観察した所によつても、今日公式的に示される Exceptio 若しくは Antithetis にあらはれる否定的機能は、本来その構文内に外形的に示されたものであり、それが音価輕易なため次第に口語の発音圏外に脱落消失し、一見 Exceptio. Antithetis の否定的機能を denn 著しくは単なる動詞接続法が代行するか如き構文が残留するに到つたのである。

附記 — denn. 及び接続法、その他副文章の機能に関し、特に私の主題に関係のないものは一切割愛した事を附記致します。

### 参 考 文 献

- 1) 相良守峯 : 「ドイツ語学概論」
- 2) 同 「ドイツ文章論」
- 3) Blatz : 「Deutsche Grammatik」 I. & II. Bd.
- 4) Otto Behaghel : 「Deutsche Syntax」 I—IV. Bd.
- 5) Einenkel : 「Geschichte der englischen Sprache」 II. Historische Syntax.]
- 6) H. Paul : 「Deutsche Grammatik」
- 7) H. Paul : 「Mittelhochdeutsche Grammatik」
- 8) Grimm : 「Deutsches Wörterbuch.」
- 9) Kluge : 「Etymologisches Deutsches Wörterbuch」
- 10) Paul-Euling : 「Deutsches Wörterbuch」
- 11) Wunderlich : 「Unsere Umgangssprache」
- 12) Wunderlich : 「Der deutsche Satzbau」
- 13) Jacob Wackernagel : 「Vorlesungen über Syntax」



専攻別	講義題目	教官	専攻別	講義題目	教官
哲学専攻	倫理学特殊講義 <small>人格と実存</small>	鬼頭	西洋史専攻	西洋史特殊講義 <small>(独乙中世史)</small>	阿部
	哲学演習 <small>Kant: Kritik der reinen Vernunft.</small>	〃		同 演 習	西井
	倫理学演習 <small>Kant: Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft.</small>	戸頃		同	阿部
	古代哲学史演習 <small>Plotinus: On the One and Good.</small>	安藤		人文地理学概説	竹内
				地 誌 学	斎藤
				地 理 学 演 習	竹内
				地理学実習 <small>(野外実習を含む)</small>	斎藤
	社会学概論	井森	国語国文学専攻	国文学概論	窪田
	社会学特殊講義 <small>産業社会学</small>	〃		国語学概説	高羽
	社会学外国書講読	〃		国文学特殊講義 <small>(八代集論)</small>	窪田
	同	森		同 <small>(国文学研究方法論)</small>	大津
	社会学演習	井森		同 <small>(今昔物語集の研究)</small>	川口
	同	森		国語学特殊講義 <small>(音韻史)</small>	高羽
	心理学概論	宮		同 <small>(俳諧史)</small>	沢木
	心理学特殊講義			国文学演習 <small>(源氏物語)</small>	窪田
	特殊実験演習	宮		同 <small>(枕草子)</small>	大津
	普通実験演習	鈴木		同 <small>(謡曲能狂言)</small>	川口
	心理学演習 <small>(講読)</small>	宮		国語学演習 <small>(表記法)</small>	高羽
	同 <small>(〃)</small>	鈴木		同 <small>(西鶴世間胸算用)</small>	沢木
史学地理学専攻	国史概説	箭内	英米文学専攻	イギリス文学特殊講義 <small>Shakespeareの周辺</small>	山本
	国史特殊講義 <small>(近代外交史上の諸問題)</small>	〃		イギリス文学史 <small>(主として19世紀)</small>	大沢
	同 <small>(史籍解題)</small>	下出		英語学 <small>(音声学)</small>	大場
	国史演習 <small>(続日本紀)</small>	〃		英語学特殊講義 <small>Shakespeareの文法的研究</small>	神保
	東洋史特殊講義 <small>(秦漢時代史)</small>	慶松		特殊題目研究 <small>Plays of the University Wits.</small>	大久保
	東洋史演習	〃		アメリカ文学講読演習 <small>Faulkner, Hemingway &amp;c.</small>	谷口
	西洋史概説	西井			
	美術史	沢柳			

学専 科攻 別		講義題目	教官	学専 科攻 別		講義題目	教官
文          学          科	英米文学専攻	Chaucer: "The 作品講読 Canterbury Tales"	梶	文          学          科	言          語          学          専          攻	記述言語学	浅井
		同 現代英文学 Galsworthy: Forsyte Saga, Part 1	大島			音 声 学	〃
		同 O' Neill : Beyond the Horizon.	大土井			言語学特殊講義	小沼
		語学演習 会話及英作文	Winn			ギリシャ語文法	〃
	ドイツ文学専攻	ドイツ文学史	伊藤			中国語講読	鈴木
		ドイツ文学特殊講義 Einige Betrachtungen über Goethes Faust.	藤森			中国語文法	〃
		ドイツ語学	吉田			ロシア語学演習 (和文露 訳)	三浦
		特殊題目研究 Kunstau- fassungen von Lessing, Goethe und Schiller.	松山			ロシア語学作品講読 A. P. Tchekhov : "Nevesta"	〃
		作品講読 "Sappho"	小原			フランス語講読	浅井
		同 Ricarda Huch: Aus dem Dreissigjährigen Kriege.	菅原			〃 文 法	同
		同 Schnitzler : Der Mörder.	山下				
		ドイツ文学演習 Vietor : Deutsches Dichten und Denken von der Aufklärung bis zum Realismus.	秋山				

學科 專攻別		講義題目	教官	學科 專攻別		講義題目	教官
法		憲法	松岡	法		經營經濟学	丸岡
		行政法第二部	相内			特殊講義（統計学）	美濃部
		民法第一部	島津			同（工業政策）	静岡
		民法第二部	清水			同（経済法）	
		民法第三部	松坂			同（身分法） <small>民法演習に替へ得る</small>	中川
		民法第四部	中川			同（刑事政策）	保古
		商法第一部	品川			外国書講読（英）	松岡
		民事訴訟法	沢田			E.A.G. Robinson: 同(英) The Structure of Competitive Industry	丸岡
学		刑法第一部	岩崎	学		M. R. Cohen: 同(英) "European Legal Philosophy."	三代川
		刑事訴訟法	香川			McIver, R. M. 同(英) "The Web of Government."	鈴木
		国際法	田畑			H.Laski: "State in Theory and Practice."	和田
		国際私法	実方			W. Wittich : Epochen der deutschen Agrar- geschichte.	進藤
		社会学	沼田			K. Renner : Capitalist Property and its Functions	島津
		法理学	三代川			同(英) "American Corporation Act."	品川
		法制史	高柳			W. Ashley: The Economic Organ- isation of Eng-land.	鎌田
		政治学	秋保			David Ricardo: Principles of Political Economy and Taxation	永田
		政治学史	五十嵐			F. List : Das Nationale System der Politischen Ökonomie.	正木
科		政治史	秋保	科			
		経済原論	}島津阿部				
		経済史	進藤				
		財政学	大畑				
		世界経済論	正木				
		経済政策	石井				
		社会政策	平田				
		統計学	三国				

専攻別 学科別	講義題目	教官	専攻別 学科別	講義題目	教官
法学科	同 (独)	香川	哲学専攻 哲学科	社会思想史	井森
	演習 (行政法)	相内		社会学演習	〃
	同 (経済史)	鎌田		同	森
	同 (金融論)	永田		社会学外国書講読	井森
	同 (経営経済学)	丸岡		同	森
哲学専攻 哲学科	哲学概論	鬼頭	国史専攻 史学	国史概説	箭内
	倫理学概論	戸頃		国史特殊講義 (近代外交史上の諸問題)	〃
	宗教学概論	橋本		国史演習	〃
	近世西洋哲学史	鬼頭		同 (続日本紀)	下出
	古代中世哲学史	安藤	東洋史専攻 史学	東洋史概説	増井
	中国哲学史 法家思想と支那社会	山田		東洋史特殊講義	〃
	日本思想史	戸頃		同 (秦漢時代史)	慶松
	Kant: Kritik der 哲学演習 Reinen Vernunft.	鬼頭		東洋史演習 (大学衍義補)	〃
	同 現代哲学	〃		同	増井
	同 古代哲学	安藤	西洋史専攻 史学	西洋史概説	西井
	同	中村		西洋史特殊講義	阿部
	心理学概論	宮		西洋史演習	西井
	応用心理学概説	鈴木		同	阿部
	心理学研究法	宮	地理学専攻 地理学専攻 文科	人文地理学概説	竹内
	心理学演習	〃		地誌学	斎藤
	同	鈴木		地理学特殊講義	竹内
	普通実験演習	〃		地理学	竹内 斎藤
	特殊実験演習	宮	国語国文学専攻 文科	国文学概説 (近世)	窪田
心理学専攻 心理学科	生理学	下川		国語学概説	高羽
	精神病学	佐竹		国文学特殊講義 (歌合の研究)	大津
	社会学概論	井森		同 (日本靈異記研究)	川口
専社会 攻学					

専攻別 学科別	講義題目	教官	専攻別 学科別	講義題目	教官
文 学 科	国語国文学専攻	同 (漢文学) 莊子講読	山田	ドイツ文学専攻	ドイツ語学 Deutsche Syntax 小原
		同 (俳諧史)	沢木		ドイツ語学特殊講義 Ueber "Unsere Umgangssprache" Wunderlichs 藤井
		国語学特殊講義 (国文法)	高羽		ドイツ文学演習 Nietzsche und Rilke 秋山
		国文学演習 (源氏物語)	窪田		特殊題目研究 Thomas Mann 西
		同 (少将滋幹の母)	大津		作品講読 Aus dem Dreissigjährigen Krieg Ricarda Huch 菅原
		同 (今昔物語集)	川口		同 Theodor Jaekel : Aus Goethes Prosa 松山
		同 西鶴(世間胸算用)	沢木		同 Mahrholz : Literaturwissenschaft und Literaturgeschichte 小松
		国語学演習 (音韻史)	高羽		
	英米文学専攻	イギリス文学史 (十九世紀 英文学)	大沢	言語学専攻	言語学概論 浅井
		イギリス文学特殊講義 Shakespeare の周辺	山本		比較言語学 Indogermanische Sprachwissenschaft. 小沼
		アメリカ文学演習 L. Trilling : Reality in America.	谷口		言語学特殊講義 マス・コムユニケーション 浅井
		英語学	梶		言語学演習 (朝鮮語の音韻分析) 〃
		英語学特殊講義 Shakespeare の文法的研究	神保		(フランス書講読 de Saussure: Cours de linguistique générale) 浅井 宮川
		語学演習 (英作文, 会話)	大土井		ロシア語学: Izmenenie znacheniya slov 三浦
		特殊題目研究 D. H. Lawrence : Sons & Lovers.	甲斐		ロシア語学作品講読 A. P. Tchekhov : Yumoristicheskie rasskazi 〃
		E. Blunden : A Hundred English Poems	大沢		中国語作品講読 (龍鬚膏) 鈴木
		同 Kyd's Plays	大久保		中国語文法 (中国語文講話) 〃
		同 Milton : Paradise Lost	清水		古典語講読 ギリシヤ語読本 (高津) 小沼
		同 Greenough & Kittridge : Words & Their Ways in English	大場		ラテンギリシヤ語 ラテン語初歩文法 〃
		同 G. S. Fraser: The Modern Writer and His World	大島		フランス語作品講読 Maupassant: le Roman 浅井 宮川
ドイツ文学専攻	ドイツ文学専攻	ドイツ文学概論	伊藤	フランス語文法	フランス語文法 〃
		ドイツ文学史 Deutsche Klassik	藤森		〃
		ドイツ文学特殊講義 人及び芸術家としての Keller	伊藤		〃